

漢法苞徳塾資料	No. 148
区分	巻頭言
タイトル	鍼灸治療の新時代へ
著者	八木素萌
作成日	

日本の鍼灸治療は、今日明らかに新しい時代へ向かって動き始めている。関係法規が改正され、資格試験制度も改まったからではない。それは'89秋の経絡学会の討論を見れば明らかである。

日本での古典の正統を承けた鍼灸術の流れは、今日では主として『経絡治療』である。未だ沢田流の影響はかなり残っているが「派」としては解体している。50年前の圧痛点・反応点療法、家伝療法中心の状況では、そこに本質的な危機があると感じ、このままでは鍼灸治療は駄目になるという認識・危機感をバネにして、「診断から治療への一貫した」治療方式を提唱し「鍼灸治療は鍼灸の医学で」と主張した。それは『経絡的治療』と称した。

「新古典主義」を標榜して「原典批判」「原典研究」を訴え実行した。提唱している治療システムは『内経』『難経』などの鍼灸医学の典籍に基づくものと主張した。

このシステムのスタンダードは「“六部定位脈差診”主導の“証”決定に基づいて“随証療法”として主に69難の配穴方式に法とって取穴し治療する」「手足の要穴を用いる“本治法”に、腧募穴その他の手足要穴以外の穴を配穴する“標治法”を組み合わせて、経脈の調整を図る事によって治療する」のである。

50年の歳月の中に当初の『経絡的治療』は何時か『経絡治療』に変わり、治療界の大勢力になり、診断手法と理論研究にも成果を上げた。50年の蓄積があればこそ、その内部と友好的周辺とから、新しい展開と脱皮によって、より強力な治療体系として再構成されなくてはならないと言う意識が生じたと言える。内在的な問題と時代の要請とが検討せしめているのである。「証」概念の検討・「証を樹てる上での問題」「随証療法」などの問題・取穴配穴論の問題・が議論の俎上に上った。これ等を理論的にも臨床的にも解決する事が鍼灸人に課せられているのである。我々はこの道を歩こうと思う。